

博士論文審査及び学力の確認の結果

審査委員（主査）

今井昭夫



学位申請者

比留間洋一

論文名

「ベトナム村落の民族誌
新郷約を鏡としてみた社会関係と信仰祭祀」

博士論文審査及び学力確認の結果

審査委員会は、今井昭夫を主査とし、本学の栗原浩英教授、三尾裕子教授、丹羽泉教授、外部から末成道男・元東京大学教授を副査として、比留間洋一氏から提出された学位請求論文『ベトナム村落の民族誌 新郷約を鏡としてみた社会関係と信仰祭祀』の審査と最終試験を2012年12月22日に行ない、全員一致で学位申請者に博士（学術）の学位を授与することがふさわしいと判断した。

論文の概要

本論文は、人類学的調査から得られた資料に基づく、ベトナム北部デルタ村落の暮らしと歴史経験の民族誌であり、特に1990年代の市場経済発展期における社会関係と信仰祭祀に焦点をあて、それを新郷約（村の掟を定めた公的文書）という新しい資料を手がかりとして明らかにしたものである。本論文は、新郷約が実際のどのような社会関係や信仰祭祀を映し出しているかについて実に緻密に記述、分析し、これまで手つかずであった郷約の人類学的研究を切り拓く研究となっている。また、2年間の集中調査を含む10年余りにわたる調査村のフィールドワークの成果により、1990年代の市場経済発展がもたらした新たな社会状況に対して、ベトナム北部デルタ村落の人々がどのように反応したかについての貴重な、深みのある民族誌的記録となっている。

本論文の構成は以下の通りである。

第1章 先行研究と本研究の位置づけ

本章では、先行研究を（1）ベトナム北部デルタ村落研究と（2）ベトナム新郷約研究の2つに分けて整理し、本論文の位置づけを行なっている。比留間氏は、ベトナム北部デルタ村落研究の主な成果として、①社会関係の特質では父系血縁集団ゾンホ（đòng họ）と「情感tình cảm」（他者と衝突することなく調和して生きることを証明する実践）の重要性とその相関関係についての見方、②信仰祭祀の特徴と1950年代以降の社会主義革命の影響についての実態的解明を挙げ、しかるに、1990年代以降の市場経済発展期に父系血縁集団ゾンホと信仰祭祀がどのような展開をみせたかについて、相互関連性を全体的に描き出

し民族誌としてまとめた先行研究はほとんどなかったとしている。

また新郷約研究についても、郷約の復活は多くの研究者から注目はされているものの、新郷約の実証的研究は乏しかったとし、これらに対して本論文は、1つの新郷約とその新郷約を作成した村落（イエンサーむら）を対象とした長期の現地調査データとの対応関係を検証する点で、これまでにない実証的研究であると位置づけている。

第2章 イエンサー新郷約の特徴と背景

本章では、イエンサーむらの社会関係や信仰祭祀の特徴を映し出す鏡として、イエンサー新郷約の特徴が明らかにされている。ベトナム北部デルタ村落においては、古くから郷約が作成されており、時期的に区分すると1921年以前の「旧郷約」、植民地期の1921年以降の「改良郷約」、そしてドイモイ期1980年代末以降の「新郷約」に分けられる。イエンサーの古い郷約（本体である1916年版に、1928年、1934年の補充修正版が付加されている）は基本的には「改良郷約」と見なすことができ、「改良郷約」は「新郷約」作成にあたっての1つの前提となっていることが指摘される。

「新郷約」成立のもう1つの前提である、1989年に旧ハバック省の一村落から始まった新郷約編纂運動についても説明され、イエンサー新郷約制定もその動きを受けたものであることが示される。イエンサー新郷約の元編纂委員からの聞き取り結果に依拠して、新郷約の編纂過程が明らかにされ、北部デルタの他の約130の新郷約との比較からイエンサー新郷約の19項目の特徴が析出されている。

第3章 大規模ゾンホが形づくるローカルな社会関係

本章では、イエンサーむらの父系血縁集団ゾンホをめぐる社会関係について論じられる。イエンサーのゾンホ構成は、4つの大規模ゾンホとそれ以外の小規模のゾンホに大別される。このどちらかの成員であるかは、特に1945年以前はむらの社会生活の上でしばしば決定的な意味をもっていた。その状況は、1950年代後半の社会主義革命以降はいったん薄らいだが、1990年代以降、集団農業経営組織（合作社）の機能減少を補うような形で、ゾンホの活動が再活性化し、むらの社会生活におけるゾンホの役割が増大しつつあるとの指摘がなされている。

このような状況を反映して、イエンサー新郷約では、むら祭りの人員動員、ゾンホ内の相互扶助（奨学金創設など）、新郷約の普及実現などに関して大規模ゾンホの役割が明記され、また大規模ゾンホ内部における協力の推奨と係争の回避について言及されている。

第4章 小規模ゾンホとむらの婿の社会関係

本章では、むらの社会関係の中で、大規模ゾンホではない小規模ゾンホと「むらの婿」（他のむらの男性が、このむらの女性を娶ったが、なんらかの事情で通常の夫方居住でなく、妻のむらで居住している者がこのように称される。日本のように妻の家に婿入り婚をしているわけではない）の人々に焦点があてられる。1990年代に本格化した市場経済化の下、イエンサーではゾンホ活動が活発化することによって父系血縁原理に基づく秩序の回復と人員動員（祭礼など）の再組織化がはかられた。このことは大規模ゾンホの立場を強

めるものであり、一方、そこから外れる小規模ゾンホや「むらの婿」などの新規移入者からは、互助を目的とするソム（xóm：むらの下位単位）の任意組織（ホイ：hội）を設立する動きが生じた。

このような状況に対して、イエンサー新郷約は、1954年以降に移入者が増えたことに触れ、イエンサーに居住するむらの外部者も新郷約を守るよう明記するとともに、むらの外部者が一次埋葬のためにイエンサーの土地に「寄葬」する際の手続きを定め、葬儀の主体をゾンホだけではなく、ゾンホまたはソムとし、小規模ゾンホと「むらの婿」等への配慮がみられるとしている。

第5章 ソムの信仰祭祀と社会関係：夏の行事

イエンサー新郷約には入夏儀礼に関する条文があり、これは他の新郷約にない特徴である。本章では入夏儀礼という夏の行事をとりあげ、ソムにおける女性を中心とした社会関係と信仰祭祀について論じられる。入夏儀礼はソムの中老年女性が中心になって行なわれる儀礼で、小規模ゾンホの成員が比較的多く、ソムの地縁による互助組織を設立していたソム・ジエンでは、とりわけ盛大な入夏儀礼が行なわれている。このように、ソムにおける任意組織の設立と入夏儀礼の組織化との間には相関関係が窺える。イエンサー新郷約に入夏儀礼に関する条文が盛り込まれたことは、父系血縁原理に基づく社会編成に対応して、女性中心の社会関係ではソムの地縁原理に基づく信仰祭祀を主体的に担う動きが生じたことを反映している。

第6章 寺の信仰祭祀と社会関係

信仰祭祀を介した女性の社会関係としては、上記のソムの信仰祭祀のほか、寺における信仰祭祀グループとハウボン憑依儀礼のグループがあり、本章ではそれら2つの社会関係が扱われる。1990年代に入って、この2つの信仰祭祀活動が活発化した。仏教信仰が経済活動から引退した女性たちの信仰上のニーズを満たすものだとすれば、ハウボン憑依儀礼は商売や家運をよりよくしたいという現世利益のニーズに応えるものであり、また父系血縁原理に基づく「情感」の強化・強制による抑圧からの解放を求めるものだとされる。イエンサー新郷約は、寺に対する村の主導権を強調し、ハウボン憑依儀礼は禁止するが、そのための入信儀礼（ドイ・バット・ニャーン）は是認する対応をしていると比留間氏は指摘する。

第7章 寺・廟における信仰祭祀と社会関係

本章では、むら祭りや長寿祝いを通して、「むら」という「わたしたち」意識をめぐる問題について論じられる。亭・廟で旧正月前後に開催されるむら祭りや長寿祝いについて、イエンサー新郷約はむら祭りの新しい動員方法や長寿祝いと老親の扶養について定めているが、それは次のような変化を反映したものとなっている。かつてむらの祭りや長寿祝いは男性のみに正式な参加資格があったが、1990年代の復興後は、女性たちも亭・廟の儀礼や寄合に参加するようになり、ジェンダーによる差異とジェンダー内部の差異を超えた、むらの「まとまり」を可視化する機会になっている。

終章

イエンサー新郷約と実際の社会関係・信仰祭祀との相関関係についての分析から、イエンサー新郷約は党・国家の指導・管理の影響が強い一方で、村人が自ら主体的に、外部の周辺村落やメディア情報と村落内部の錯綜した社会関係を勘案しながら作成した面もある「曖昧な」特徴をもつものだされる。1990年代の市場経済発展がもたらした新たな社会状況に対して、むらとして一定の規制を加え、「わたしたち」意識を形成するものとして新郷約が制定されたと結ばれている。

論文の評価

本論文の評価すべき点として審査員からは以下の諸点が挙げられた。

(1) 新郷約の分析を通してのベトナム北部デルタ村落の民族誌的記述をしようとした試みは成功しており、意義深い。本論文は、最初の本格的な新郷約の人類学的研究だといえる。新郷約が党・国家によって「上の指導から」下されてきたという面だけではなく、村人の自主性の側面を実証的に明らかにし、「内在的」理解をしようとした姿勢は評価できる。このように新郷約と実際の村落生活の対応関係を記述、分析した研究はこれまでほぼ皆無であった。また調査村の新郷約だけでなく北部デルタの村々の約130の新郷約と比較検討した点も従来の新郷約研究に見られないもので、新郷約研究への貢献度が高い。

(2) 調査村において滞在型調査を通算で3年間と長期間にわたって実施し、堪能なベトナム語能力を駆使して村人に深く溶け込み、民族誌記述として非常に緻密なフィールド・データをとっており、数多くの興味深い在地資料を発掘し提示している。また女性の信仰祭祀集団、子どもや老人などの年齢集団、ゾンホでも大規模ゾンホばかりでなく小規模ゾンホにも着目するなど斬新なトピックを扱っている。従来学術的に説明するのが難しかった村落内組織「ザップ (giáp)」についても有益な情報を提供している。入夏儀礼はベトナム独自の儀礼として、フランス植民地期の文献からも注目されてきたが、本論文のように詳細に記述したものはこれまでになかった。

(3) 本論文は、1990年代から2010年までの10年余りのイエンサーむらの構造変化をフォローし、現代ベトナム語の文献資料ばかりでなく、漢字やチューノムなどの文字資料も有効的に使用しており、歴史人類学的研究のよいサンプルとなっている。

以上の点について審査委員の間では意見は一致したが、その一方で本論文のいくつかの問題点や課題も審査委員から指摘された。①本論文では、1990年代の社会変化がどのように新郷約の編纂に反映されたのかが主に扱われているが、新郷約が実際の日常生活の中でどのように使われているのかの実態面、あるいは実効性があるのかについてもきめ細かく研究していく必要がある。②新郷約の編纂について、「上からの指導」と「下からの個性化」との齟齬・錯綜関係が明確に説明されていない。③新郷約編纂やむらの任意組織設立と共産党の地方支部との関係について十分には言及されていない。④「情感」の捉え方があまりに「しがらみ」的側面に偏りすぎている。⑤イエンサーむらはハノイ近郊であり、現在は新住民も多くなっている。本論文では新住民についてはあまり扱われていなかったため、新旧住民の混住ぶりを描き出すとさらに興味深いものになる。⑥今後、新郷約の全

国的な展開とその帰結についての実態調査が望まれる。

本論文の意義を十分に評価した上で、最終試験では以上の点についての質疑応答と学力の確認がなされたが、申請者は、これらの質問に対して一つ一つ丁寧に、的確に答えた。本論文の問題点と課題についても十分に自覚的であり、今後の研究の方向性を見定めている点も高く評価された。

したがって、審査委員会は論文審査と学力の確認の結果、全員一致で学位申請者に博士（学術）の学位を授与することがふさわしいと判断した。